

京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



2022.7
No. 763

目次

[大学の動き]

- 京都大学春秋講義(令和4年度春季講座)を開催 5706
- 京都大学このえ会設立総会を開催 5706
- スイスのカシス連邦大統領兼外務大臣による公開講演「Science and Diplomacy to Meet the Challenges of the 21st Century」を開催 5708

[部局の動き]

- 橋渡し研究支援機関キックオフシンポジウムを開催 5709
- 創立125周年記念貴重資料展示「絵物語の貴重資料展」を開催 5710

[寸言]

- 西田幾多郎の掌の上で 大山 一也 5711

[随想]

- 地域と地球の社会システムの変遷に想う
—もう一つの私の研究人生探訪40余年
名誉教授 岡田 憲夫 5712

[洛書]

- わが青春に悔なし 木下 千花 5714

[榮譽]

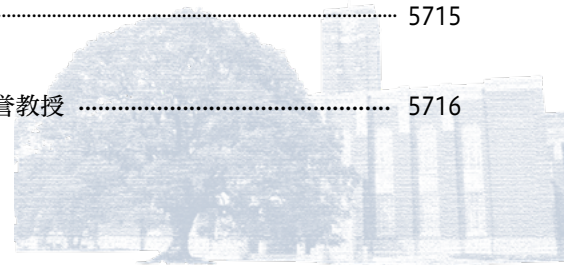
- 山下真由子 数理解析研究所助教が第1回羽ばたく女性研究者賞(マリア・スクウォドフスカ=キュリー賞)を受賞 5715

[訃報]

- 東村 敏延 名誉教授 5716



京都大学



大学の
動き

京都大学春秋講義（令和4年度春季講座）を開催

京都大学春秋講義は、京都大学における学術研究活動の中で培われてきた知的資源について、広く学内外の人々と共有を図るため、1988年秋から開講している公開講座です。

今回はメインテーマを「AIと向き合う」として、4月15日（金）、22日（金）、28日（木）に、全3回の講義を行いました。

第1回は熊谷誠慈 人と社会の未来研究
院准教授による「伝統とテクノロジーの融合
によって切り拓くこころの未来：伝統知AIと

Psyche Navigation System」、第2回は吉井和佳 情報学研究科准教授による「音楽がわかるコンピュータ」、第3回は神谷之康 情報学研究科教授による「脳内イメージを解読する」と題した講義が行われ、3日間で計475名が参加しました。感染症対策のため、当日の質疑応答は行いませんでしたが、事前に多くの質問が寄せられ、AIへの関心の高さがうかがえました。

参加者からは、「AIをどう使いこなすのかという、技術を社会へ還元させる考え方は非常に興味深かった」、「人間と機械の音楽学習の違いを大変興味深く感じた」、「AIの研究を通し『人間の脳は、複雑で面白い!』と感じ好きになった」などの感想が寄せられました。



会場の様子



講義をする熊谷准教授



講義をする吉井准教授



講義をする神谷教授

(総務部(渉外課))

[目次に戻る](#)

京都大学ここのえ会設立総会を開催

「京都大学ここのえ会」は、本学出身で社会で活躍する、または活躍したいと願う女性が学部・研究科の枠を超えたネットワークを形成すること、女子学生や女性研究者等への緩やかな支援を行うことを目的に2021年11月11日に設立されました。

6月4日（土）、同会の設立総会が百周年時計台記念館とオンラインで開催され、計35名が参加しました。

冒頭の稲垣恭子 理事・副学長の挨拶では、設立の経緯や会の名称の由来が紹介されました。会の名称は、学歌の「九重に花ぞ匂へる」という歌詞から取り、京都大学の出身者、女性研究者や女子学生が社会で才能を開花できるようにとの願いが込められています。その後、湊 長博 総長が祝辞を述べ、澤田 純 日本電信電話株式会社代表取締役社長 社長執行役員（京都大学鼎会会長）からの祝電も披露されました。

大学の
動き

次に、設立に際しての議題を確認し、初代会長に浅山理恵 SMBCオペレーションサービス株式会社副社長が選ばれました。続いて、久能祐子 理事が「跳ぶように考え、這うように証明する！ 21世紀に求められる人物像・社会像」と題して講演を行いました。グループに分かれての意見交換も実施し、今後の活動内容について、参加者の多様な背景、経験を踏まえ、さまざまな意見があがりました。

最後に、浅山会長からの今後ますます会員を増やしていきたいという力強いメッセージで、設立総会は締めくくられました。

本設立総会は、初めて会員同士が交流する機会となり、最後まで話は尽きず、大いに盛り上がりました。意見交換の内容をもとに、今後の活動を展開し、ネットワーク形成、京都大学の男女共同参画推進事業の推進に貢献していきます。



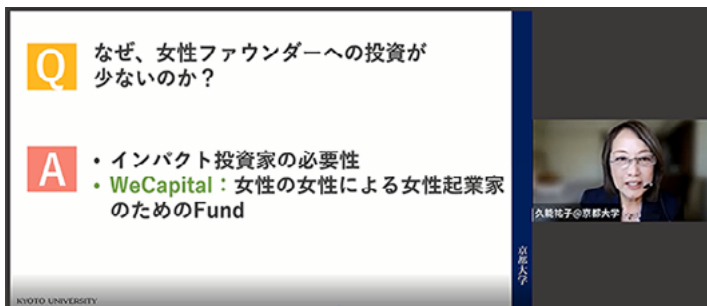
挨拶をする稲垣理事・副学長



祝辞を送る湊総長



閉会挨拶をする浅山会長



講演をする久能理事



オンライン参加者集合写真



会場集合写真

(総務部(渉外課))

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動きスイスのカシス連邦大統領兼外務大臣による公開講演
「Science and Diplomacy to Meet the Challenges of
the 21st Century」を開催

4月21日(木)にスイスの連邦大統領兼外務大臣であるイグナツィオ・カシス博士(H. E. Dr. Ignazio CASSIS, President and Head of the Federal Department of Foreign Affairs of the Swiss Confederation)を迎え、百周年時計台記念館にて「Science and Diplomacy to Meet the Challenges of the 21st Century」と題した公開講演を開催しました。会場には、教職員、学生など約250名が集いました。カシス連邦大統領は、2017年より連邦外務大臣を務め、2022年よりスイスの連邦大統領を務めています。



イグナツィオ・カシス大統領

講演会は、欧州拠点所長で、国際担当理事補である横山美夏 法学研究科教授の司会により進められ、湊 長博 総長が挨拶を述べました。続いて、カシス連邦大統領より、日本とスイスは共に科学とイノベーションの水準が高いことを踏まえ、「Science and Diplomacy to meet the Challenges of the 21st Century」と題し、科学と政治の融合は一般に科学外交として知られており、その科学外交が地球規模課題に対してどのような役割を果たせるのかについて、話がありました。その後、会場からの質問を受けて、質疑応答が行われました。

講演後、西谷祐子 法学研究科教授をモデレーターとして、湊総長、スイス連邦経済・教育・研究省教育・研究・イノベーション庁長官のマルティナ・ヒラヤマ 博士、スイス国立科学財団、国家研究評議会長のマティアス・エッガー 博士、チューリヒ大学のクリスチャン・シュワルツェネッガー 副学長により、日本とスイスの学術連携の意義や、今後、学術連携を拡大するにあたり、産業界はどのような役割を果たせるかが議論され、盛況のうちに閉会となりました。



講演の様子



パネルディスカッションの様子

(企画部(国際交流課))

[目次に戻る ↗](#)



橋渡し研究支援機関キックオフシンポジウムを開催

本学が文部科学省より「橋渡し研究支援機関」に認定されたことを記念し、医学部附属病院先端医療研究開発機構 (iACT) 主催による「橋渡し研究支援機関キックオフシンポジウム」を5月23日 (月) にオンラインにて開催しました。

当日は医学部附属病院等本学の研究者をはじめ、国内の大学や病院、研究機関、企業、行政の関係者、一般市民など250名以上が参加しました。

第1部では、岩井一宏 医学研究科長による開会の辞、宮本 享 病院長の祝辞に引き続いて、湊 長博 総長が「橋渡し研究支援機関として京都大学が社会に果たす役割」について講演しました。その後、建部俊介 文部科学省研究振興局専門官より「本認定制度と今後の橋渡し研究プログラム」について紹介があり、また永井純正 iACT 医療開発部長より「京都大学拠点のこれまでの実績と今後の展望」について発表がありました。

第2部は、学外から5名の講師を迎え、「橋渡し研究支援機関としての京都大学に期待すること」について話を伺い、その後、伊藤達也 iACT 医療開発部講師、服部華代 同特定講師のファシリテートのもとで「橋渡し研究を支える橋渡し研究支援機関の在り方」についてパネルディスカッションを開催しました。最後は、稲垣暢也 iACT 機構長からの閉会の辞でシンポジウムは幕を閉じました。

参加者からは、「橋渡し研究支援機関認定制度について理解できた」「医薬品・医療機器の開発における課題がよくわかった」「研究支援の参考になった」などの感想が寄せられました。

【関連リンク】

医学部附属病院

<https://www.kuhp.kyoto-u.ac.jp/>

医学部附属病院 先端医療研究開発機構 (iACT)

<https://iact.kuhp.kyoto-u.ac.jp/>

(医学部附属病院)

[目次に戻る](#)

橋渡し研究支援機関キックオフシンポジウム
基礎研究の成果を革新的な医薬品・医療機器等として国民に提供するために

開催形式 Zoom Webinar (参加費無料)

日程 2022年5月23日 月 14:00~16:15
主催 京都大学医学部附属病院 先端医療研究開発機構 (iACT)

京都大学は2021年12月20日付けで、文部科学大臣より「橋渡し研究支援機関」に認定されました。そこで、認定を記念し、学内外の幅広い方々より橋渡し研究支援機関として京都大学に期待することなどについてご講演いただくこととなりました。つきましては皆様方の参加をお待ちしております。

プログラム

第一部
14:00-14:05 開会 伊藤 達也 (iACT 医療開発部 講師)
14:05-14:10 祝辞 宮本 享 (京都大学医学部附属病院 病院長)
14:10-14:15 橋渡し研究支援機関として京都大学が社会に果たす役割 湊 長博 (京都大学 総長)
14:15-14:30 橋渡し研究支援機関認定制度と今後の橋渡し研究プログラムについて 建部 俊介 (文部科学省研究振興局 ライフサイエンス 専門官)
14:30-14:50 橋渡し研究支援機関のこれまでの実績と今後の展望 永井 純正 (iACT 医療開発部 部長)

第二部
14:50-15:40 議長 永井 純正 (iACT 医療開発部 部長)
*「橋渡し研究支援機関としての京都大学に期待すること」(各10分)
*「医学研究者の立場から」小堀 健一郎 (立命館大学 理工学部 教授)
*「医学研究者の立場から」小堀 健一郎 (立命館大学 理工学部 教授)
*「拠点外機関の支援部門、医療機器開発経験の立場から」久津見 弘 (京都府立医科大学附属病院 臨床研究開発センター-CTREC 講師)
*「製薬企業出身の立場から」服部 華代 (公認会計士、京都高薬研研究所 (ASTRI) 地域産業活性化本部 京都府ライフサイエンス創薬開発センターアドバイザー)

15:40-16:10 パネルディスカッション
「橋渡し研究を支える橋渡し研究支援機関の在り方と注」
パネリスト：小堀 弘、小堀 健一郎、服部 華代、伊藤 達也、伊藤 達也、服部 華代 (iACT 医療開発部)

16:10-16:15 閉会の辞 稲垣 暢也 (iACT 機構長)

お申し込み方法: ご参加希望の方は下記 WEB サイトよりお申し込みください。
https://u02web.zoom.us/join/register/WN_p4RDU0MgSS2X4VnL9wY4dg
お申し込み後は、ご登録いただいたメールアドレスに Webinar 参加のご案内をお送りいたします。

お問い合わせ: 京都大学医学部附属病院 先端医療研究開発機構 (iACT) 八村・ネフ
E: info@kuhp.kyoto-u.ac.jp

シンポジウムのフライヤー



創立125周年記念貴重資料展示「絵物語の貴重資料展」を開催

附属図書館は、6月1日(水)から京都大学創立125周年を記念した「絵物語の貴重資料展」をWeb上のデジタル展示と館内のパネル展示により開催しています。

この展示では、附属図書館が所蔵する貴重資料の中から「絵物語」をテーマに6点を選定し、あらすじと見どころを紹介しています。また、Webの展示サイトから京都大学貴重資料デジタルアーカイブにアクセスし、高精細の画像や現代語訳のストーリーを見ることができます。「年表でたどる! 京都大学附属図書館の貴重資料展」では、1899年の開館以来、附属図書館が行ってきた100回以上の資料展を年表形式で紹介し、多種多様な資料を収集・保管・公開してきた図書館の歴史がたどれるようになっています。

デジタル展示は12月22日まで、パネル展示は8月31日まで開催しています。

【関連リンク】

デジタル展示Webサイト

<https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/mainlib/exhibition/exh2022>



デジタル展示「肥後国海中の怪 (アマビエの図)」



館内パネル展示

(附属図書館)

[目次に戻る ↗](#)

西田幾多郎の掌の上で

大山 一也



若い時から手当たり次第の乱読だが、いつの頃からだろうか、
どういう分野に行っても西田幾多郎が立ちはだかっているよう
な気がする。大学時代に「善の研究」を数ページで放り出し、
哲学の道で酒盛りに興じていた因果なのか、「京大出身なのに
西田を読んでいないのか」という誹りを畏怖するあまりか（結局、一度もそんなことを聞かれた
ことはなかったが）。

「はじめにEXCÉSがあった。」鮮烈な冒頭で始まる「構造と力」。著者である浅田 彰氏が
高校の先輩であることを知り、この本を手にとったのは共通1次試験が終わり、京大の国語の
2次試験対策として細切れの明治文語文を読むのに飽き飽きとしていた時だった。

エントロピーの増大による一様化に抗する過剰な生の方向故に、EXCÉSが生じてしまった反自然
的存在としての人間像からはじまり、構造主義とポスト構造主義を俯瞰し、ドゥルーズ=ガタリ
の世界まで美意識の高い旋律で駆け抜けていく。カトリックの学校で絶対的な存在に触れる中、サル
トルやドストエフスキーの実存主義の世界感から抜け出せなかった当時の自分にとっては、時空を
超えてワープするようにスリリングで、その後の自分の「知のパースペクティブ」を一挙に拡げてくれた。

そんなニューアカデミズム全盛の当時、西田幾多郎を語るのは、他大学の女子大生を哲学の
道に案内する時くらいのものであった。その後も、西田を敬して遠ざけながらも、熱力学の冷徹
な法則に抗う世界観を求めて、関心領域は各方面に拡がっていく。

佐伯啓思氏を始めとする欲望の拡張としての資本主義観、要素還元主義に対する非線形シス
テムの世界、自己組織化と進化の論理、福岡伸一氏の「動的平衡」としての生命科学の世界、
資本主義の閉塞感の中で自己同一性と身体性の回復を求める野中郁次郎氏の知識創造経営。

エントロピー増大に抗しつつ、有限の時間を生きるものとしての命の燃やし方を求めて、分野
を問わず「知のジャングル」を彷徨ってきた。

と、思っていたのだが…。

佐伯啓思氏が「西田幾多郎」の著書を出す。福岡伸一氏は「動的平衡」と西田の「絶対矛盾
的自己同一」は同義的な概念であると気付いたと言う。「パーパス経営」の名和高司氏は「西田
哲学を経営学に敷衍したものが野中郁次郎氏理論」だと説く。

哲学の世界ならいざ知らず、生命科学の世界や経営学・組織論の世界まで西田が現われるとは。

「異質な知の結合がイノベーションを産む。出来るだけ関心領域を拡げなさい」と若い社員
に偉そうに説きながらも、私が永年彷徨っていたと思っていた知のジャングルは、所詮、巨人西
田の掌の上だったのだ。

皆、あの独特の文体に悪戦苦闘したと言いながら、西田幾多郎に回帰していく。

「そうか、若い頃は分からなかったが、今なら分かるのか。」と「善の研究」を引っ張り出し
てみたが、西田の掌から見事に転げ落ちるまで、大した時間は要しなかった。

（おおやま かずや、三井住友信託銀行代表取締役社長、昭和63年法学部卒）

随想

地域と地球の社会システム の変遷に想う

-もう一つの私の研究人生探訪40余年

名誉教授 岡田 憲夫



はじめに

「社会システム」という言葉は今では日常でも良く耳にする。コロナ禍を体験しつつある今、「社会システム」を変えるべきだ、などと使われて実感をもった言葉になってきている。土木計画学、社会基盤計画、総合防災学、過疎地域のまちづくり論などを長く研究してきた私にとって「社会システム」そのものは直接の専門でない。しかし40年以上の研究人生を振り返ると、地域と地球に関わる「社会システム」との出会いが決定的であったと痛感する。三重の意味でそう感じるのである。①境界横断的な研究テーマとの出会い、②境界横断的な研究の場との出会い、③時代の潮目と世界観の変動の目撃者としての出会いである。①と、②、③の出会いは切り離せないことも多い。同時進行・同時発生と呼ぶべきかもしれない。

IIASAでの①、②、③の同時体験

スケールが大きく、複合的な「社会システム」との出会いもある。最初でかつ衝撃的な体験は、1978年から1980年の2年間。学位をとった直後で30歳になったばかり。研究の場はウィーン近郊にある「国際応用システム分析研究所」(IIASA <https://iiasa.ac.at/>)であった。スウェーデンが抱えていた水資源開発と環境保全の適切な調整問題の研究プロジェクトと取り組み始める。自身の専門を主軸とするだけでは視界に入りにくい「横軸方向に広がる社会問題群」の宝庫に出会う体験でもあった。つまり①境界横断的な研究テーマとの出会いに満ちていた。同じ年代の、後には著名な研究者となる人たちと知的格闘もした。既に世界に知られたシニアの研究者も加わって、日々討議をする刺激的な研究サロン空間(②の研究の場)が実在した。しかも研究者たちが「東西冷戦の壁」を魔法のように乗り越える「疑似的・実験的な社会システム」が架け橋として機能していたのである。ベルリンの壁はまだ険しく立ちはだかっていたが、冷戦の終焉を予期させる希望と信頼のベースが育っていた。ベルリンの壁崩壊の予兆を体感することで、③時代の潮目と世界観の変動の、一人の目撃者にもなったのである。

ベルリンの壁の崩壊以降の世界と社会システムの動向

1989年末のベルリンの壁崩壊。さらに30年ばかりが経過した2017年から2019年にかけてのことである。不思議な縁で私はドイツ・ベルリン近郊のポツダムのIASS研究所(<https://www.iass-potsdam.de/en>)にSenior Fellowとして滞在する機会に恵まれた。ここでも①、②、③の同時発生の体験をする。ポツダムはかつての西ベルリンに隣接する東ドイツ側にあった。だが、そこには両側を隔てていたものがもう存在しないのだ。感慨ひとしおである。かつては共産圏に属していた国からの研究者も、まるで過去の不思議なできごとを見るかのように受け止め

随想

ていた。冷戦の終焉は過去のこととする未来志向の希望と信頼のベースが学際的研究機関では実りつつあると確信した。

2022年2月は潮目となるか？未来に託して

私の確信は今年2月の末以降のウクライナを巡る「新冷戦への時間の逆転？」を目にして大きく揺らいでいる。ともあれ、科学者、研究者同士が垣根を越えて敬意を払い、切磋琢磨してさやかな研究交流空間を維持することは不可欠であろう。閉じこもった研究空間の中だけではなく、生々しい、「社会システム」の新しい挑戦課題として研究者はどう受け止めるべきか、呻吟している。未来がいずれ答えを紡いでくれるであろう。

(おかだ のりお, 平成24年退職, 元防災研究所教授, 専門は総合防災学)

[目次に戻る ↗](#)

洛書

わが青春に悔なし

木下 千花



京都大学における私のアイデンティティの核には、「京大出身ではない」ことがある。例えば、専門科目で日本映画史を教える度に『わが青春に悔なし』（1946年、東宝）について熱く語ってしまうのも、ひょっとして非出身者ならではの京大に対する抽象的な憧れのなせるわざなのかも知れない。

黒澤 明の戦後第一作である『わが青春に悔なし』は、反軍国主義・民主主義・女性解放のプロパガンダとしてGHQの映画検閲官に絶賛されたことが知られている。1933年、八木原教授（大河内傳次郎）は自由主義者であるがために京都帝国大学法学部を追われる。その学生でリーダー格の野毛（藤田 進）は左翼運動に身を投じ、糸川（河野秋武）は保身の道を選び検事となる。八木原の娘・幸枝（原 節子）は東京に出てタイピストとして自活するうち野毛と再会し、同棲する。野毛は大陸通の評論家として売り出し中であつたが、反戦スパイ活動によって官憲に逮捕され、謎の獄死を遂げる。幸枝は野毛の実家におしかけて住み込み、村人による過酷な差別を耐え忍び、その母（杉村春子）とともに田を耕す。敗戦後、幸枝は農村の民主化を導く文化的リーダーとなっていた。

滝川事件とゾルゲ事件を強引に結びつけており、思想の中身が曖昧であるとか、戦中は軍人や軍国乙女を演じていた俳優が一年あまりで反権力のヒーローになるのはあまりに恥知らずではないかとか、結局のところ農民を見下しているとか、この映画に向けられてきた批判は当を得たものである。しかし、そうした批判にすべて首肯しつつ、なお、本作の圧倒的な力は他所にあると思う。小っ恥ずかしいまでの「青春」の称揚と幸枝＝原節子の強烈なキャラクター、さらに言えば、それらをあくまでも映画の方法によって具現させる黒澤の意志と力業である。冒頭のシーンでは、「紅萌ゆる丘の花」を劇伴に、吉田山の木漏れ日のなかを駆け抜ける幸枝、野毛、糸川を望遠レンズで捉えたショットが次々とモンタージュされる。後に日本を代表する映画監督になる大島渚は、京都市内の中学に通う14歳のときにこの映画を見て「青春」イメージに魅了され、京大法学部進学を志した。

強い意志を持った幸枝像は、公開当時の男性映画批評家によって「軽薄にして強引な人物創造」「エキセントリック」「アブノーマル」と形容され、散々に批判された。それに対して黒澤は、自我を貫くヒロインが「もし男だったら」彼らは文句を言わなかったはずだと答えている。私はこれだけで黒澤のすべてを許すことができる。幸枝は映画の前半では激情に駆られてこれ見よがしにピアノを弾いてみせるなど、戦前日本の現代劇におけるワガママお嬢様のクリシェを総動員して描かれ、中盤では刹那的な愛に生きるハリウッド・メロドラマの「妻」、終盤ではソヴィエト映画調の闘う農婦となる。黒澤が映画史への情熱を結実させた幸枝は、矢島翠からレイ・チョウまで、女性映画批評家の心をざわめかせてきた。近年、北村匡平の研究によって、公開時には一般の映画ファンにも支持され、原節子人気を確立したことが明らかになっている。

（きのした ちか、大学院人間・環境学研究科教授、専門は日本映画史）

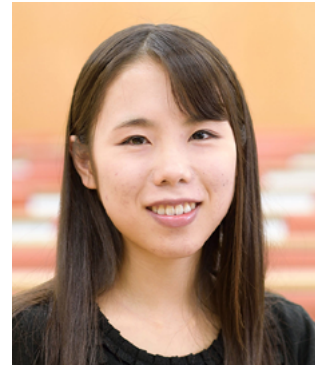
[目次に戻る ↗](#)

栄誉

山下真由子 数理解析研究所助教が第1回羽ばたく女性研究者賞（マリア・スクウォドフスカ＝キュリー賞）を受賞

山下真由子 数理解析研究所助教は、5月17日（火）に第1回羽ばたく女性研究者賞（マリア・スクウォドフスカ＝キュリー賞）を受賞しました。

この賞は、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）と駐日ポーランド共和国大使館が、日本の女性研究者のより一層の活躍推進に貢献することを目的に、国際的に活躍が期待される若手女性研究者を表彰するため創設されました。山下助教は、非可換幾何学を専門とし、数学のみならず物理学との境界における場の理論の研究をしています。圧倒的に学術的プレゼンスが秀でており、数学での大きな国際会議のプレナリー講演に招待されるなど、すでに世界的にもその実力が高く評価されていることから今回の受賞となりました。



（数理解析研究所）

[目次に戻る ↗](#)

訃報

このたび、東村敏延 名誉教授が逝去されました。
ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同氏の略歴、業績等を紹介します。

東村 敏延 名誉教授

東村敏延先生は、5月4日に逝去されました。享年92。

先生は、昭和28年3月京都大学工学部繊維化学科を卒業、同大学大学院研究奨学生を経て、同31年4月同大学工学部助手、同36年4月同助教授となり、同36年6月には同大学より工学博士の学位を授与されました。昭和45年8月京都大学工学部教授となり、平成5年3月に停年により退官され、同年4月京都大学名誉教授の称号を受けられました。

この間永年にわたって高分子化学の教育、研究に努め、多くの独創的研究成果を挙げるとともに、その研究成果を通じた指導により多数の人材を育成し、我が国の高分子化学分野の研究水準の向上に貢献されました。また、学外においては、平成5年4月滋賀県立大学開設準備顧問、同7年4月同大学教授・工学部長となり、同12年4月同大学名誉教授とされました。さらに、平成15年4月聖ペトロ学園教授に就任するとともに聖泉大学及び聖泉大学短期大学部副学長に就任し、同17年4月聖ペトロ学園理事兼聖泉大学及び聖泉大学短期大学部学長となり、同20年4月聖泉大学名誉教授となり、教育行政の面においても、功績を挙げられました。

先生は高分子合成分野で多くの先駆的な研究に取り組み、カチオン重合の反応機構、炭素カチオンの化学、精密重合（リビングカチオン重合）、高分子の精密合成などに関する広範な研究成果を300編以上の学術論文として発表され、どの研究も国内外で高く評価されています。特にカチオン重合の発展に多大な貢献をされ、その優れた研究業績に対し高分子学会より高分子学会賞と高分子化学功績賞を受賞されました。また、平成22年には瑞宝中綬章を受章されています。

このように先生は、永年にわたって研究と教育の両面で我が国の学術の発展に多大な貢献をされました。

(大学院工学研究科)

[目次に戻る ↗](#)



京大広報
No.763

令和4年7月25日 発行

発行 京都大学総務部広報課
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
E-mail:kohho52@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

※ご意見・ご感想をお寄せください。
「京大広報」の既刊号は、次のURLでご覧いただけます。
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/public/issue/kouhou/>

京大力、新輝点。



2022年、京都大学は創立125周年
URL:<https://125th.kyoto-u.ac.jp>